

《一》次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

自宅の最寄り駅から地下鉄に乗り込むと、電車の座席は微妙な空き具合であった。

寒い時期ということもあり、着膨れた乗客がみんな左右に余裕を取って座っている。結果、混んではいないが、座るには勇気のある車両になっていた。やむを得ず、ドアの脇で立ちん坊を決め込んだ。帰宅で混み合う時間帯には、まだまだ早い午後2時頃の有楽町線のことである。

ふと目の先に、ランドセルを背負ったまま本に夢中になって座っている小さな小学生がいるのに気が付いた。背格好からして、まだまだ低学年だということが分かった。絵本ではなく、字のやや多い本を読んでいるように見えたので、小学校の二年生くらいであろうか。半ズボン姿のその小さな男の子は、自分が座っている席の左側に、紺色の上履き袋や工作で作ったような紙の箱を投げ出している。

私は、その子の前に立った。すると目の前に立たれたことに気が付いたその子は、私の方をじっと見上げた。そしてめんどくさそうに荷物を自分の膝の上におもむろに置いた。

『電車の中で、他のお客さんの迷惑になるようなことは駄目だよ』

そんな目だけの会話が、どうやら通じたようだった。私が腰掛けると、その小学生は、もうすでに本に戻っていた。一心□□に図書館のシールが貼ってあるハードカバーに顔を埋めていた。他の乗客のほとんどがスマートフォンに指を置き、コキザみに滑らせているのに対して、なぜか、その姿は好感が持てた。荷物を投げ出すような公共マナーに反した行為を差し引いても、おつりが来るほどだったのである。

何を読んでいるのだろうと好奇心がむくむくと湧いたが、残念ながら角度的に表紙のタイトルを読むのは無理であった。その熱中度から、探偵ものとかではないかと推測した。私はタイトルの探索は諦め、自分の手帳を鞆から取りだし、その日のそれからの予定を確認することにした。

2、3駅が過ぎ、手帳をしまつて隣を見ると、相変わらずその半ズボンは本をにらめつけるように読んでいる。そして時折、ページをめくり、しばらくすると、また次のページをめくっていた。その様子を見るともなくぼんやり見ていると、ある瞬間、あるページのある行で目が止まったように思えた。それまでゆっくりと顔を回転させ行を追っていたのが、ぴたりと動かなくなったのである。当然ページめくりの手も動かない。じっと同じ行を読み返しているように思えた。

すると突然、今度は、ページを今まで読んできた方に向かって、勢いよく逆にめくりだしたのである。一体何が起こったのだ。逆に戻りながら、時々、手を止め拾い読みしたかと思うと、また勢いよくめくりだす。何かを探している、何かを探しているのだ、私にはそう思えた。そして遂に、ある箇所を探り当てると、じいっと読み出した。緊迫が隣の私にも伝わってきた。そして、それまで何も発していなかったその小学生が一言つぶやいた。

「たしかに……」

私は、吹き出しそうになった。

何が「たしかに」なんだよ!? 何を納得したんだよ、君は!? そこまで入り込んでるわけ!?

想像するに、最初にぴたと止まったページには、彼が驚くような出来事を書いてあったのであろう。例えば、物語の主人公が見事な推理をしてある問題を解決した、とか。そして、その小学生は、その推理の元となった叙述を再確認するために、数十ページ前まで慌てて遡ったのである。そして、あらためて読み直すと、そこにはある事実が隠れていたのを発見したのだった。そこで思わず、彼の口から、「たしかに……」。

そして私は、この小さな小学生に、およそ似つかわしくない「たしかに」という言葉遣いに思わず吹き出しそうになった……。私は、ますます、その本のタイトルを知りたくなった。大人気ないが、私もその本を読んで、その箇所で「たしかに……」ってなりたくなったのである。

急に、その子が立ち上がった。降りる駅が来たのである。私の目は必死に、閉じつつあるその本を追い続けた。ここで逃すとそのチャンスは永遠にない。一瞬、タイトルの一部が見えた。かろうじて一部が見えたのである。そこには『ドリトル先生なんかとか』と書かれていたのだった。

数日後、私は事務所の近くの図書館の児童文学の棚の前にいた。もちろん、あの小学生の持っていた本を見つけに来たのである。あの小学生のように「たしかに……」ってなりたくて来たのである。でも、困ってしまった。『ドリトル先生なんかとか』は12冊もあったのである。

試しにその中から『ドリトル先生月から帰る』というタイトルを手にした。しかし、目次を見ただけでは、この本のどこで手がぴたと止まり、どこであの「たしかに……」が生まれるのか、皆目見当がつかない。『ドリトル先生とヒミツの湖』という「たしかに……」が生まれそうなタイトルも開けてみた。しかし、拾い読みでは分かりようがなかった。私は全12巻を前に途方に暮れ

た。「たしかに……」は□□<sup>D</sup>「一タ<sup>せき</sup>では手に入りそうもないのである。やはり、最初の1行から紐解<sup>ひもと</sup>かないと無理なのだろうか。紐を必死で手繰<sup>たぐ</sup>るように読み進んだあかつきの、あの『たしかに……』なのであろう。

そして、その「たしかに……」というキョウチが安直に得られないということが分かった私は、同時に、<sup>E</sup>自分の中に、ある感情が横たわっていたことに気付いてしまった。いや、薄々<sup>うすうす</sup>感じてはいたのだが、正直言うと、気付きたくはなかったのかもしれない。そして、この「たしかに……」さえ手に入れば、それは知らなかったものとして済ませられるのではないかという妙な期待もあった。

では、その知りたくなかった感情とはどういうものであろうか。

私は、ドリトル先生の本が<sup>④</sup>トクテイでできなかった時、まず、自分の態度に「たしかに……」を享受<sup>きやうじやう</sup>する資格がないことを思い知らされた。それは熱中の<sup>たましの</sup>賜であつたのである。<sup>F</sup>それだけを見つけて楽しもうなんて虫のいい話である。そしてその時、私は、あの小学生に軽い嫉妬<sup>しつと</sup>のようなものを覚えていたのにも気付いたのであつた。嫉妬と言う言葉が激しすぎるとしたら、羨ましい気持ちと言つてもいいかもしれない。では、その羨ましさとは何か。そして、それはどこから来ているのか。

私は、あの日、地下鉄に乗った時、いつものように移動時間を有効に使おうと、座るやいなや手帳を開いて今日の予定を確認した。そこには、いつものように出席すべき会議が<sup>⑤</sup>レッキョ<sup>⑤</sup>されていた。その確認作業が終われば、コンピュータを開いて、来ているメールを確認するつもりであつた。返事を求めるメールがたくさん来ているはずだ。そして、一本でも出せば、義務は減る。私は忙<sup>いそが</sup>しい、私の時間は埋め尽くされている。そんな時、聞こえてきたのだつた、あの言葉が。「たしかに……」

人間にとつて、時間は自由にならない。時間は誰<sup>だれ</sup>に対しても平等に過ぎていく。だからこそ、時間を無駄にせず、有効に使わなくてはならない。私が電車での移動時間に手帳を開いたのも、コンピュータを開こうとしていたのも、そのためである。しかし、その時、隣に熱中がいたのである。その小さな熱中は流れゆく時間も存在している空間もなく、ただただ熱中していた。時間は誰に対しても平等に過ぎてはいなかったのである。私は、その小学生に羨ましさを感じてしまった。その羨ましさとはどこに向かったものだったのか。

小学生がふんだんに持つている時間に対してか、それとも、あの熱中の仕方にか。

答えは分かっている。しかも、その気持ち、あの電車で半ズボン姿の小学生の隣に座った時から始まっていたことも分かっているのである。

(佐藤雅彦「たしかに……」)

問一 この文章にはもともと「本に熱中するあまり、お店を広げていることも忘れていのである。」という一文が含まれていました。どこに入れるのが最も適切ですか。入れる箇所の直前の五文字を答えなさい。

問二 傍線部A「小学生」のことを、筆者は「男の子」「自分」「その子」「君」「彼」以外にどう呼んでいますか。文中から二種類の呼び方を抜き出しなさい。

問三 傍線部B「一心□□」、傍線部D「□□一タ」の□に適切な漢字を入れ、四字熟語を完成させなさい。

問四 傍線部C「おつりが来るほどだった」とは、どういうことですか。七十五字以内でわかりやすく説明しなさい。

問五 傍線部E「自分の中に、ある感情が横たわっていた」とありますが、それはどういう感情ですか。百字以内で説明しなさい。

問六 傍線部F「それだけを見つけて楽しもうなんて虫のいい話である」とありますが、どういう態度に対してそう言っているのですか。七十五字以内で具体的に説明しなさい。

問七 傍線部①～⑤のカタカナの語を漢字に改めなさい。

《二》次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

その日も、ツバメはお気に入りの電線から町の景色を眺めながら、明日からのことをずっと考えていました。日を重ねるごとに、毎日一歩一歩、秋へと移り変わってゆくのがツバメにもひしひしと感じられました。はやく出発しなくちゃ。このところずっとそのことで頭がいっぱいでした。<sup>①</sup>気持ちばかりは焦るのに、なかなか踏ん切りが付きません。この町を去ることについて考えれば考えるほど、ちゃんと南へ辿り着けるだろうか。新しい町が気に入らなかったらどうしよう。それよりなにより、途中で死んじゃったらどうしよう。そんなあてどない不安がとめどなく溢れ出して、小さな心臓が張り裂けそうになってしまふのでした。まるで一人だけちっとも飛べるようにならずに、どんどん飛べるようになっていく他の兄弟たちの背中を眺めて、<sup>②</sup>途方に暮れた幼い頃のようにでした。

ちゃんと別れを噛みしめたいとかもつともらしいことを言ったって、結局は南へ行くのが怖いだけじゃないか。僕はなんてダメなんだろう。ツバメの気持ちはどんどんと暗く落ち込んでいくばかりでした。

もういつそのこと、ここで冬を越しちゃおうか……。

もう何度出たかしない弱気が、つい口をついて出かったときのことです。なにかが動いたような気がして顔を上げると、向こうに見えるビルの窓際に座って、朝からずっと熱心に仕事をしていたおじさんが、突然机から体を起こしたかと思うと、大きく両腕をあげて大きなアクビをするところが見えました。ガラスの向こうで声は聞こえないはずなのに、音まで聞こえてくるような、それはそれは立派で見事なアクビでした。

大きく伸びをしてから、かけていた眼鏡を外して涙を浮かべた目をこするおじさんの姿を見て、ツバメは思わずクスクスと笑ってしまいました。そしてなんだかわからないけれどずっと気が楽になって、ふと、やっぱり明日出発しよう、と思ったのでした。あまりにも自然にそう思ったので、<sup>③</sup>ツバメは自分でもびっくりしてしまいました。だいじょうぶだよ。きつとだいじょうぶ。あのおじさんを通して、この町にそう言われたような気がしていました。

それから日が暮れるまで、ずっとその電線の上からいつものように町を眺めて過ごしました。もうツバメは、迷ってはいませんでした。すると、どういうわけか町の景色が、思い悩んでいたさっきまでよりもずっと<sup>④</sup>鮮やかに目に飛び込んでくることに気がつきました。学校帰りの男の子たちが五、六人、なにか叫びながら楽しそうに道路を駆け抜けてゆくのが見えました。風に吹かれて、たくさん電線が同じリズムで揺れています。よく見れば、街路樹の葉っぱの色もずいぶんと茶色くなりました。葉っぱが少なくなつたせいも、同じ場所から眺めていても、いつの間にかずいぶん遠くまで見渡せるようになっていきます。

不思議なものだとツバメは思いました。こうして改めて眺めてみると、季節が一つ巡っただけなのに、大好きだった夏のこの町と、秋になろうとしているこの町では、なんだかまるで違う町のようにも見えてくるのでした。夏の頃よりも影の色がずっと淡く、建物の輪郭が穏やかで、冷たくなつたとばかり思っていた風には、冷たさの中に慈しみがありました。午後の優しい光があちこちに、よきによきと建っているビルの窓ガラスに反射して、キラキラと輝いています。

ツバメはその景色をとてもし美しいと思いました。そしてもしかしたらこの瞬間を見ているのは世界中で自分だけなのかもしれない、という考えが頭を過って、そんな光景を自分だけが見ることのできたといううれしさと、その美しさを誰とも分かち合えないという哀しさに挟まれて、<sup>⑤</sup>閉じられた輪の中をぐるぐると永遠に飛び続けているような気分になりながら、せめてこの景色を忘れないようにしようと、目をぱちくりと大きく見開くのでした。

それにしても、なにかもいつまでも変わらないようにいて、すこしずつ変わってゆくものだと、ツバメは思いました。僕だつてついこの間までは巣の中で鳴くことしかできなかったのに、いまはこうして電線の上で行き交う人を眺めて、明日には長い旅に出て、まだ知らない町に住むことになる。これからやったことのないことをいっぱい経験して大人になってゆく。でも、<sup>⑥</sup>それでも僕は、同じ僕なのだろうか。いま心を奪われた美しい瞬間や、いま考えていることを、ずっと忘れずにいることができるのだろうか。

日が沈んで、ぐっと冷え込んだ寒さに身を縮こまらせて、草の間から聞こえてくる虫の声に耳を澄ませながら、そんなことをぐるぐると考えているうちに、ツバメはいつの間にか眠ってしまいました。

(クサナギシンペイ「誰も知らないツバメの話」より)

問一 波線部AとBの語句とほぼ同じ意味の語句を、それぞれ後の選択肢から選び、符号を書きなさい。

A					B				
あてどない					途方に暮れた				
イ	先の見えない	ハ	やんごとない	ニ	あてにならない	ホ	抑えようのない	イ	道をまちがった
ロ	とてつもない	ハ	やんごとない	ニ	あてにならない	ホ	抑えようのない	ロ	手ぐすねひいた
イ	先の見えない	ハ	やんごとない	ニ	あてにならない	ホ	抑えようのない	ハ	時間が過ぎ去った
ロ	とてつもない	ハ	やんごとない	ニ	あてにならない	ホ	抑えようのない	ニ	手立てがなかった
イ	先の見えない	ハ	やんごとない	ニ	あてにならない	ホ	抑えようのない	ホ	行方も知れなかった

問二 傍線部①「気持ちばかりは焦るのに、なかなか踏ん切りがつきません」とありますが、どういうことですか。五十字以内で説明しなさい。

問三 傍線部②「ツバメは自分でもびつくりしてしまいました」とありますが、どういうことにびつくりしたのですか。四十字以内で説明しなさい。

問四 傍線部③「鮮やかに目に飛び込んでくる」とはどういうことですか。その説明として、次の中から最も適切なものを選び、符号を書きなさい。

イ 迷いが晴れたツバメの目には、悩んでばかりでいた先ほどまでと違い、町の一つ一つの風景が生き生きと見えるようになった、ということ。

ロ 明日出発しようと思えたツバメには、この町の風景が二度と見られないと思われたため、一つ一つが名残惜しく感じられた、ということ。

ハ この町に励まされたように感じたツバメが改めてこの町の風景を見ると、あらゆる所に自分を応援してくれる町の姿があることに気づかされた、ということ。

ニ 気持ち became なったツバメが町を眺めてみると、町は既に秋になろうとしていて、その哀愁と慈愛の入り混じる様子に感動させられた、ということ。

ホ いつもの気持ちに帰ることができたツバメの目には、いつも通りの幸せそうな町の風景が、いつもよりも実感を持って見えた、ということ。

問五 傍線部④「閉じられた輪の中をぐるぐると永遠に飛び続けているような気分」とありますが、どのような気分なのですか。その説明として、次の中から最も適切なものを選び、符号を書きなさい。

イ 町の美しさをおじさんに教えてもらえたうれしさと、そのうれしさをおじさん自身と共有できない哀しみが繰り返し訪れて、どっちつかずの気分。

ロ 町の風景にとらわれて苦しいような、それでいて気持ちは自由でうれしいような、矛盾する気持ちにからめとられている不思議な気分。

ハ どうしようもない孤独の中で、永遠に自分だけにしか分からない気持ちをかかえて飛び続けなければならないことに、哀しみを抱いている気分。

ニ 美しい町の風景を独り占めできた喜びと、そのすばらしさを孤独に味わうしかない哀しみとのどちらの気持ちにも落ち着けないでいる気分。

ホ 眼前の風景の美しさの本質が、孤独な町での生活で生まれたはかない喜びにすぎないことを知りつつ、その現実から目をそらすにいられない気分。

問六 傍線部⑤「それでも僕は、同じ僕なのだろうか」とありますが、ツバメはここでどういうことを考えているのですか。七十字以内で説明しなさい。

次のⅠ・Ⅱの問いに答えなさい。

I 次の①～⑩の傍線部のカタカナの語を漢字に改めなさい。

- ① 細かいことについては、各自のサイリヨウに委ねられた。
- ② サウジアラビアはOPECのメイシュとされる。
- ③ フクシンの部下に裏切られ、彼は衝撃を受けた。
- ④ 仲人がお祝いのコウジョウを述べた。
- ⑤ 禍根を残さないよう、ゼンゴサクを講じる必要がある。
- ⑥ 昆虫をセツシャした画像を保存した。
- ⑦ プレゼントを赤い紙でホウソウした。
- ⑧ 彼の優秀さはシュウモクの一致するところだ。
- ⑨ 悪友にそそのかされて、道をアヤマる。
- ⑩ 勝つための作戦をネる。

Ⅱ 次の⑪～⑮において、下段は上段の語句の意味を示している。空欄に当てはまる適切な漢字一字を、それぞれ記しなさい。

- (11) 猫ねこの□  
 場所が狭せまいこと。
- (12) □が利きく  
 わずかな兆候を、巧たくみに探さぐり当てること。
- (13) □がはやい  
 食物などが腐くさりやすいこと。
- (14) □がかかる  
 強いものの底護ひごや影響えいきやうの下もとにあること。
- (15) □が通う  
 形式的・事務的ではなく、人間らしい思いやりが感じられること。

